

ああ 幼きが故か

「おじいちゃん、また『灯』の原稿書いているの。一度ぐらいホームランを飛ばしたいね。ヒットだけではつまらんよ」。孫の太^だが私のひざに乗ったまま言う。私の文章の出来を彼は評価しているのだ。

「ヒットも打てん、ファールの連続だ。何を書いてよいか、困っている」とぼやく私に、「生活の中から書くことだよ」と言う。

さりげなく「生活」という。小学五年生なので驚かされる。きっと彼の先生は点数だけを言わず、日ごろ、生活の大切さを教えているに違いない。先日は先生から「夢がある」と言つてほめられたとのこと。

彼は気だては抜群に優しい。遠くからのお客には、自分があげるお土産に小さな肝^{かん}胆^{たん}を砕く。東京の兄が来た時に贈った品物がふるっていた。猿酒の極小びん、小さい石仏面、朝鮮人参まがいの栄養剤。小遣い全部をはたいていた。私より年寄りだからの精いっぱいなのいたわりであろう。三年前のことなのに、今も兄の応接間にその三つ

が飾られていた。来客にはきまつてその由来を説明しているらしい。

彼は小さな争いさえもしない。いじめられっ子を見ても助けられないで、自分の勇気のなさを恥ずかしがることがある。それにしても、成績は極度に悪い。彼の母の里は東京、毎年夏はそこで過ごす、成績が下がると罰として滞在日数が減らされるから、通信簿だけはすぐ気にしている。その彼が今度の成績だけは彼としては一大躍進だった。「僕、あまりよすぎるので、手が震えて字が見えなかった」と、その母に胸のうちを言っていたらしい。

「僕、先生を追っかけて、ありがとう、東京へいばって行けると言ったら、もういい、もういいと、先生変な顔していたよ」。小学生から札を言われて、先生はてれただろう。彼は上京の朝、仏壇で鐘を続けざま鳴らして手を合わしている。「今朝、二十回鳴らした。二十日間東京だからね」。昨年昇天した曾祖父に毎朝のごあいさつを、彼は欠かさない。

(一九八二年八月九日)